

府中のビオトープを見つめて

第7回 ビオトープ・ネットワーク



多摩川と野川をつなぐライン上にあり、緑の核に囲まれた東芝府中事業所は、生き物が移動する際の中継地となりうる

東芝府中事業所がある一帯は、かつて農耕地のなかに未開拓の原野が広がっていたのだろう。想像でいうしかないのは、歴史は人の文化を綴るけれど、一方で自然の遍歴を残してくれないからである。ともあれ、この地域の史料が乏しいことは事実だから、それこそがかつて豊かな自然が在ったという証拠になる。

その当時、生き物たちは自由に移動と交流をしていたに違いない。森も草地も水辺も、地形の上にはほぼそのままの姿で存在していたからである。理想的なビオトープ・ネットワークがそこにあった。むしろ人工の道の上しか歩けない私たち人間の方が、移動に苦慮していたのだろう。しかし昭和から平成へ時代を経るごとに、地域の自然は蚕食されていった。このエッセイの初回に書いたように、いまでは市街地の海に浮かぶ緑の島々という表現がふさわしい。それでも生き物たちの命脈が絶たれてしまったというわけではない。

今でも、野川の流域には大小の緑地がある。大きなものも多く、矢川緑地や浅間山、野川公園などが10あまり。それらには及ばないが寺社や大学などが豊かな緑を抱えている。とくにこの地域は個人の庭の緑が濃い。それは猫の額のような土地ながら、建ぺい率50%規制の家に住む私がよく知っている。ただこうした小さな緑も大切である。生き物たちはそこを飛び石のようにして移動に使う。そして、野川とそこから広がる水系はまた緑の回廊である。野川は一時ドブ川と蔑視された時代もあったが、自然再生事業によって見違えるほどの姿に蘇った。さらに道路沿いの街路樹さえも緑の回廊の役割を少なからず果たしている。市街地とはいえ、生き物の生活空間が塊と点と帯とで配置されている。大小の緑の島とそれをつなぐ緑の回廊が、この地域のビオトープ・ネットワークを形成しているのである。

今年の春先、そんな緑地の一つ、浅間山の小高い丘に登ってみた。コナラやクヌギがようやく芽吹き、地面に頭をもたげたキンランはまだ花を付けていなかった。数多の命でにぎわう少し前の季節、雑木林はまだ静寂に包まれていた。久しぶりの浅間山での散策は楽しく、この日の目的だったいくつかの虫の画像も納めることもできた。

浅間山は多磨墓地から連続する緑地である。墓地側から入って陸橋で道路をまたぎ、社のある頂の横をぐるりと廻る遊歩道は起伏のある地形と大きく生長した雑木林のなかを抜けるので、深い山の中にいるような気分させられる。しかし小さい山なのですぐに反対側の道路に出てしまう。そこからは市街地で、さらに西へ真っ直ぐ2kmのところ東芝府中事業所がある。



野川



浅間山

執筆者紹介：新里達也

1級ビオトープ計画管理士。農学博士。専門は保全生態学および昆虫分類学。著書に野生生物保全技術（共編）や日本産カミキリムシ（共編）などがある。（株）環境指標生物代表取締役。東京都国分寺市在住。